

包荒義塾ほうこうぎじゅくという大きな招牌かんばんがそこにかかっていた。

路みちの此方側こちらがわには、大きな榎えのきの樹きがあって、それが夏の日に涼しい蔭をつくっているので、車力しゃりきや立坊たちんぼうや乃至ないしは其処そこらを通る人たちが休んでいた。

湧くように聞える読書の声！

私はなつかしくなつて、小さな姿をその窓に寄せた。其処には修業に出ている兄がいるのである。しかし一面には、こういう小僧姿の弟を他人に見られる兄を気の毒がつて、私は公然兄を訪れて行こうとはしなかった。無邪気な憐あわれな小さな気兼きがねよ。

私は兄がひょっくり出て来れば好いと思つた。そして「お、お前か。」こう言つて、肩から手をかけてくれれば好いと思つた。兄は一家の運命を双肩に担になつて、寝る目も寝ずに勉強している。下駄げだを買う銭ぜにもなく、着たきりの着物で、ぼろ袴ばかまを穿はいて、そして一生懸命に勉強している。それを思うと、私の艱難かんなんなどは、まだ言うに足りない幼心わがやまこころにも私は思つた。しかし、一面では、こうして兄が勉強しているのが羨うらやましくかつ悲しかった。

私は本郷ほんごうのその近所まで使ゆに來た。弓町三丁目……包荒義塾……そう言つて私はたどつて來た。しかしそこが近くなつて來るにつれて、私はもう人に訊きこうとはしなかった。私は勉強している兄の邪魔をしてはすまないような気がした。

湧くような読書の声……。

ふと格子戸こうしどを明けて出て來たものがあつた。私は慌あわてて其処そこを離れた。それはやはり兄と同じように破れた袴をつけて太いステッキを持った書生であつた。書生は別に氣にも留めずに、そのまま向うへ歩いて行つた。

あの書生が兄だと好よかつた。こうまた私は思つた。